

第三節 植 物

一 植 生

広島県の植生の概観

広島県の垂直植生帯は海拔九〇〇メートル以上はブナ林などの発達する冷温帯樹林域。海拔四〇〇〜九〇〇メートルは中間温帯樹林域で、その上部七〇〇〜九〇〇メートルはイヌブナやシデ類等の落葉広葉樹林が発達し、下部四〇〇〜七〇〇メートルではウラジログシなどの常緑広葉樹林やモミヤツガなどの針葉樹林が発達する。海拔四〇〇メートル以下は暖温帯樹林域で、シイ林を代表とする常緑広葉樹林が極相となる。しかし、これらの地域では極相林は稀で多くは二次林化しており、広島県では南部および沿岸部にはアカマツ二次林が多く、北部および内陸部では落葉ナラ類二次林が多い。

熊野盆地の植生

熊野盆地は南北に長く、東西を海拔五〇〇〜七〇〇メートルの山々に挟まれた海拔二〇〇〜二五〇メートルの帯状の盆地で、その大部分が熊野町に属している。その平地部分は大部分が水田や住宅地であり、海拔三〇〇メートル以上の山地は森林となっている。熊野町の約七〇％は森林で占められ、その内八〇・一％がアカマツ林である。ちなみに残りの〇・四％が落葉広葉樹林、九・三％は低木群落、九・六％が伐採跡群落、〇・三％が植林、〇・三％が竹林となっている。なお、常緑広葉樹林は少ないため植生図では省略されている(図1-3-1参照)。アカマツ林が多いのは、おそらく過去に、山林火災、伐採などの人為



- | | | | | | |
|----|--|----------|-----|--|-------------|
| 1. | | 落葉広葉樹林 | 6. | | 竹林 |
| 2. | | アカマツ林 | 7. | | 草原群落(含放棄水田) |
| 3. | | 低木群落 | 8. | | 水田及び耕作地 |
| 4. | | 伐採跡群落 | 9. | | 住宅地及び市街地 |
| 5. | | スギ・ヒノキ植林 | 10. | | 池及び貯水池 |

図1-3-1 熊野町及びその周辺の相観植生図

的な影響を受けたためと考えられ、加えて町内の大部分がアカマツの好む花崗岩地域であるためであろう。熊野町の森林植生の種組成的な特徴としては、アカマツ、サルトリイバラ、ヤマウルシ、コバノミツバツツジ、コナラ、ネジキ、ヤマツツジ、コバノガズミ、スノキ、リョウブなどの二次林要素が多いことである。さらに、森林分布の中心が海拔三〇〇〜五〇〇メートルにあり、常緑広葉樹林が発達するには、やや高海拔であるために暖温帯樹林要素のカクレミノ、シロダモ、テイカカズラ、ベニシダ、サカキなどは少なく、わずかにヒサカキが多いが目立つ。そして、モミ、ツガ、ウラジログシなどの中間温帯樹林との共通要素のソヨゴ、アセビが広く分布している。また、冷温帯樹林との共通要素であるクロモジ、ミヤマガズミ、コシアブラ、ダンコウバイ、アオハダ、タムシバナなども普通にみられている。これらのことから熊野町の森林は、暖温帯樹林の要素は貧弱であり、一方中間温帯から冷温帯樹林との共通要素を多くもつという特徴が認められる。

それでは熊野町でみられた主な植物群落について述べる。

常緑広葉樹林

アラカシはいわゆるカシのことで土壌条件の良い場所にみられる。アラカシの優占する林分としては、木棉地の神社林、城山山麓で記録したが、樹高や胸高直径が小さく二次林と考えられる。

落葉広葉樹林

ノグルミは温潤な条件を好む木で、初神の上部の流紋岩地域の谷沿いに群生しているのが見られた。アベマキは樹皮にコルク層が発達しており、かつてはコルクをとるために樹皮の採取が行われたこともある。西日本に分布し、瀬戸内海沿岸部でも特に古生層粘板岩地域には広い森林が発達することが多い。適潤な条件を好み上深原の斜面下部に群生しているのがみられたが一般的には少ない。

コナラは落葉広葉樹の中で最も身近な木で古くから「まき」すなわち薪炭材として人々に親しまれてきた木であ

る。コナラはアカマツ林内には普通に見られるが、アカマツよりも生長が遅く、コナラ林として成立するにはよい良い水分条件や土壌条件が必要である。そのため花崗岩地域では斜面下部に散在し、また保水性の良い流紋岩地域では大迫山、原山、鉾取山と続く尾根部にみられる。良い土壌条件を示すヤブコウジ、ネズミモチ、タカノツメなどがよく出現している。これには三つの型が認められた。一つはアラカシ、ヤブツバキなどをもつ適潤型コナラ林、次にネズ、ススキをもつ乾性型コナラ林、そしてクリ、アブラチャン、ヤマウグイスカグラなどをもち、原山方面に多い高所型コナラ林である。

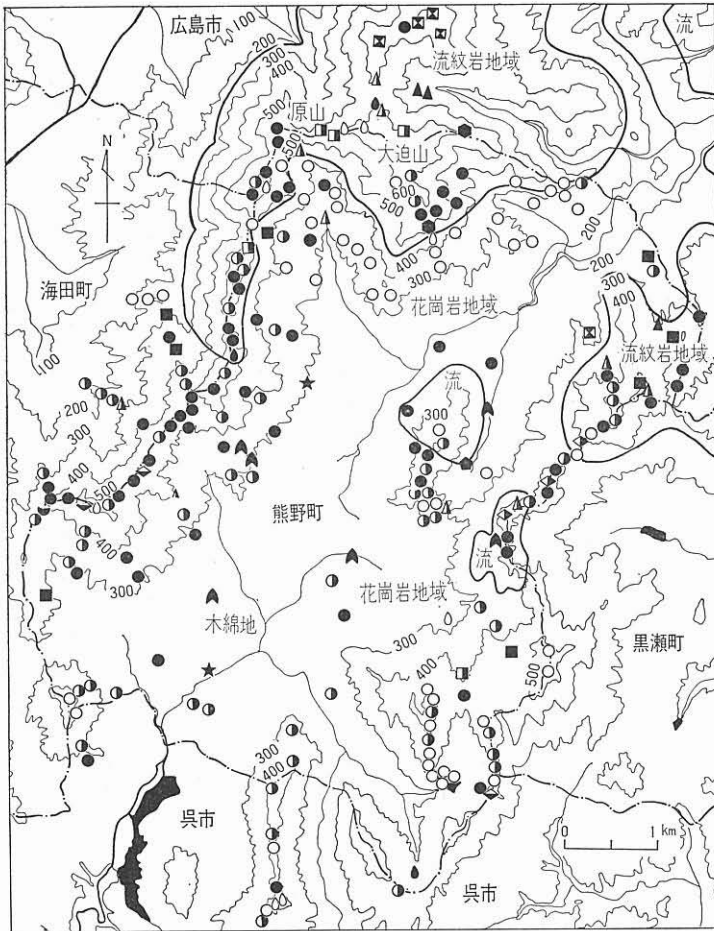
ヒメヤシヤブシ群落及びオオバヤシヤブシ群落は兩種共に路傍を中心に広く見られ、ときに群生している。本来はのり面処理のために植栽されたものが分布を拡大したものと考えられている。

低木林は伐採などにより二次的に生じたコナラ、ネジキ、コシアブラ、クロモジなどの落葉広葉樹を中心として、アセビ、ソヨゴ、ヒサカキなどの常緑広葉樹、さらにアカマツなどが加わってできたものである。ヤブコウジ、ミツバアケビ、タカノツメなどをもつ適潤型低木林、ネズ、ススキ、ナツハゼ、コシダなどをもつ乾性型低木林に区別された。

アカマツ林

アカマツ林は、瀬戸内海沿岸地域では花崗岩地域を中心に最も広く見られる森林である。その垂直分布域は暖温帯域を中心に中間温帯域にまで広がり、僅かではあるが冷温帯域にまで達する。

さて、熊野町のアカマツ林は、適潤型、中間型、乾性型の三つの型に分けられた。適潤型アカマツ林は、種組成からは、ヤブコウジ、ネズミモチ、タカノツメ、アラカシ、ヤブツバキ、クロキなどをもち、良い土壌条件や恵まれた水分条件の場所であることを示している。乾性型アカマツ林は、ネズ、ススキ、ナツハゼ、コシダなどや、さらにガンピ、シャシヤンボなどのより耐乾性のある種によって特徴づけられている。中間型アカマツ林は



- I. 常緑広葉樹林 1. ★ アラカシ林
 II. 落葉広葉樹林 1. ● ノダルミ林 2. ▲ アベマキ林 3. ● コナラ林 (1 ■ 適潤型、2 □ 乾性型、3 ☒ 高所型)
 4. ○ ヤシヤブシ類林 (ヒメヤシヤブシ、オオバヤシヤブシ)
 5. ○ 偽木群落 (1 ● 適潤型、2 ○ 乾性型)
 III. 赤松林 1. ● 適潤型アカマツ林 2. ○ 中間型アカマツ林 3. ○ 乾性型アカマツ林
 IV. 植林 1. ▲ スギ植林 2. ▲ ヒノキ植林 3. ▲ 竹林
 --- 地質の境界線
 - - - 市町境

図1-3-2 熊野町及びその周辺における主な森林群落の分布図

適潤型と乾性型を特徴づける種、ヤブコウジ、ネズなどを両方もつという中間的な性格をもっている。この三つの型の分布について、図1-3-2に示されているが、適潤型を黒丸、中間型を半黒丸、乾性型を白丸でそれぞれ

れ示している。そのほかの森林群落についても同様に湿性のものを黒く、中間を半黒で、乾性を白抜きで示しているが、その分布の特徴としては、熊野町北部の大迫山の山腹にみられる花崗岩と流紋岩の境界付近における母岩の違いに基づく適潤型と乾性型の分布の違いである。ちょうど度南向き斜面のため日射量が多く、そのため蒸散量が多くなり、特に深層風化の進んだ花崗岩地域では、乾燥条件が生じ、風化が深部におよびにくく、土壌の粒度も小さく水もちの良い流紋岩地域との違いとしてあらわれたものと考えられる。このような結果は熊野町東部および西部の南北に走る尾根部では見られなかったが、海拔や斜面方向の違いが日射量や蒸散量を低くし、また同じ花崗岩でも風化の程度が低かったりして、乾燥度を低めたためと考えられる。

植林

植林としてはスギ植林、ヒノキ植林、竹林があげられるが、これらはヤブコウジ、ネズミモチ、アラカシなどを共通にもち、ともに適潤な立地条件であることを示している。

スギ植林地は湿潤な立地が良い。町内では花崗岩地が多いために適地が少なく、合せて経済的な理由とも重なって大迫山周辺及び海上側奥の流紋岩地域を中心に少しみられただけである。

ヒノキ植林地は適潤地であることが必要で、スギほどには水分を要求しないけれども、適地は同ように少なく、流紋岩地域を中心にスギ植林地に隣接して少しみられた。

竹林としてはモウソウチク林やマダケ林が川沿いを中心に多く見られるが、一般に数アール程度の規模のものが多く、またマダケ群落も川沿いにとどきみられる。

雑草群落

熊野町の水田雑草群落と路傍雑草群落について述べる。

水田雑草群落としては、スズメノテッポウ、スズメノカタビラ、ノミノフスマ、レンゲソウ、コオニタビラコ、タネツケバナ、ナズナ、トキワハゼなどの全国的な共通種が多く、これに広島県の沿岸型を示すセ

トガヤ、カズノコグサがわずかに加わり、さらに湿田ではセリ、ミゾソバ、タガラシなどが、乾田ではハルノゲシ、ヨモギなどがこれに加わっている。

路傍雑草群落としては、ヨモギ、ススキ、オオバコ、シロツメクサ、スギナなどが多く、春にはこれに、ヒメジョオン、コメツブツメクサ、カラスノエンドウ、オランダミミナグサ、カモジグサなどが、夏から秋にはヤハズソウ、ツユクサ、コツブキンエノコロ、メヒシバなどがこれに加わることになる。

二 天然記念物（植物）

概説

熊野町内で指定されている文化財は、天然記念物の巨樹に関する一〇件のみである。県内各市町村指定の巨樹に関する天然記念物の件数では庄原市と並んで昭和六十一年現在六番目である。このことから分かるように、町が学術研究上意義の高い巨樹の保存に、いかに積極的な力を注いでいるかがうかがえる。

大歳神社のモッコクとクロマツ

出来庭にあるこの神社の境内左手奥、道路に接してモッコクがある。胸高幹囲一・四メートル、樹高一三メートルで県内でも有数の巨樹である。モッコク

は、暖帯地方に分布する常緑樹であるが、格別の手入れを行わずとも端整な形となり、葉も光沢があつて美しいことから、庭木としてよく植えられる。町内には、ほぼ同じ胸高幹囲をもつ中溝の光教坊境内のモッコクがあり、ともに昭和五十五年五月一日天然記念物に指定された。クロマツの方は、鳥居のすぐ側にその雄姿を見せていたと思われるが、今はなく切株のみがそれを想像させる。記録によると胸高幹囲四・六メートル、樹高二八メートルあつたが、昭和五十七年に枯れて伐採された。また、本樹とともに天然記念物に指定された呉地の一本松



図1-3-4 益永氏宅のヒイラギ
(昭和61年撮影)

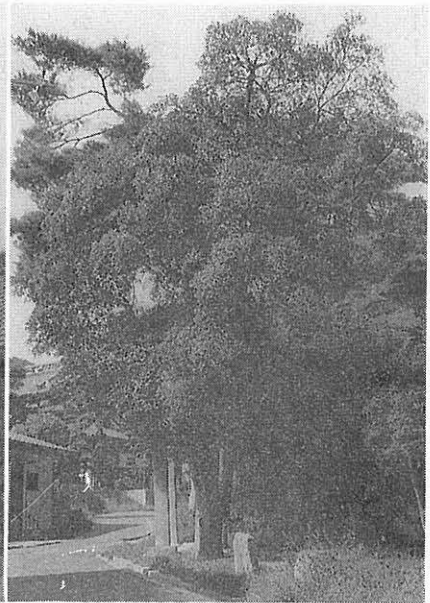


図1-3-3 大歳神社のモッコク
(昭和61年撮影)

(胸高幹囲四メートル、樹高二〇メートル)も枯れて
今はない。現在熊野町指定のクロマツの天然記
念物の生存樹はない。

益永氏宅のヒイラギ

本樹は、庭木として植
栽されているもので胸

高幹囲一・六メートル、樹高一二メートルあ
り、県内三位の雄株の巨樹である。主人の話に
よると、晩秋樹冠いっぱい咲いた花はちょ
うど白雪をいただいたようで、実に美しいこと
とである。ヒイラギは関東以南の本州から台湾
にまで分布する暖帯の常緑樹で、厄除けとして
よく門口などに植えられる。樹齢五〇年から八
〇年くらいのもものでは、葉のとげがなくなる
が、本樹にもとげがみられない。

門殿神社のフジ

萩原の小さな神社にみられ
る本樹は天然のもので、胸

高幹囲一・三メートルでやや扁平な樹幹をな
し、そばのアラカンにからみつき途中三本に分



図1-3-6 光教坊のモッコク
(昭和61年撮影)



図1-3-5 岸田八幡神社のタブノキ
(昭和61年撮影)

岐し、その一本は祠の裏に生育するアベマキの幹をつたって樹冠を広げている。呉市の天然記念物田中八幡神社の社叢のフジは、胸高幹囲二メートルあり樹齢四〇〇年と推定されることから、熊野町のフジもかなりの古木である。

岸田八幡神社のタブノキ 本樹は、祠のすぐ後ろにみ

られ、地上から二メートル付近で二つに分岐し、その一方はすでに枯れて存在しない。胸高幹囲四・二メートル、樹高二〇メートルで県内二位の巨樹である。タブノキは海に近い東北地方以南の山中にみられ、シイノキなどとともに暖帯の極相林を形成することが多い。またこの境内にはかつて胸高幹囲二・八メートルのエノキの巨樹もあったが、昭和五十八年に折れて倒れ、今は切株だけである。

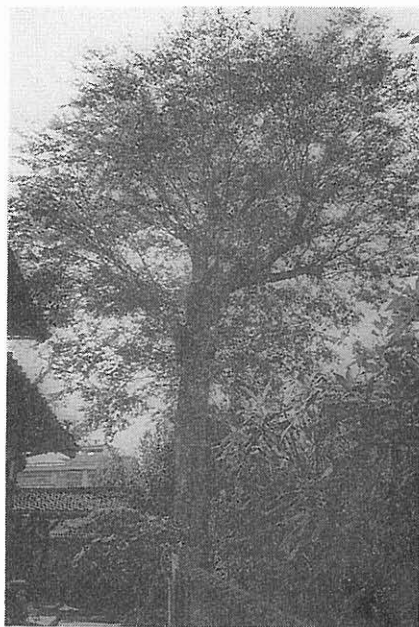


図1-3-7 佐々木氏宅のエノキ
(昭和61年撮影)

光教坊のイチヨウとモッコク

寺の境内右
手に両樹は

並んで植えられている。イチヨウは胸高幹囲四・二メートル、樹高二五メートルの雌株である。俗にいう乳柱はないが、所々小さな木瘤状のものがみられる。イチヨウはお寺や神社によくみられるが、一般に径一メートルくらいで樹齢二五〇年から三〇〇年くらいであることから、本樹も相当の樹齢と思われる。

モッコクは大歳神社のものと胸高幹囲は、ほぼ同じであるが、樹高はやや低い。

佐々木氏宅のエノキとサカキ

両樹とも屋敷の裏手にみられる。このエノキは樹冠を大きく広げ母屋の屋根の一部を覆いよく繁っている。昭和五十三年頃母屋の火災で、幹の一部がいたんでいるが、樹勢はよい。胸高幹囲二・四メートル、樹高二五メートルある。エノキは、一里塚の木として、また神木として植えられているが、一般には屋敷林として植えられ、日本各地に樹形の美しい巨木が多い。サカキは暖帯の森林中によく自生しているが、神事の樹木であることから神社の境内によく植えられている。佐々木氏宅のサカキのように、民家にこのような巨木がみられることは珍しい。胸高幹囲一・二メートル、樹高一〇メートルあり、県内で天然記念物に指定されているのは本樹のみであるが、スズ病のため現在は葉を落とし、無惨な老木をさらしている。

て役立つものと思われる。

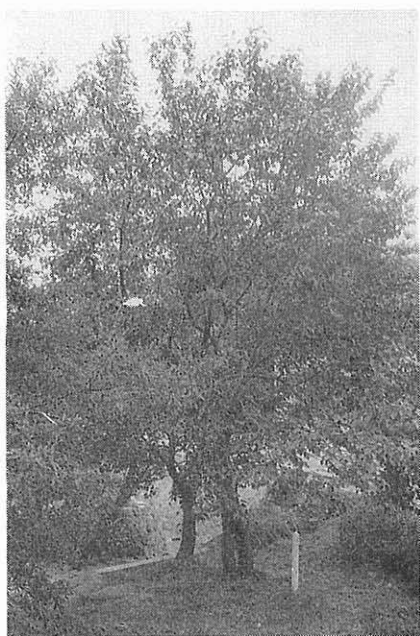


図1—3—8 平谷のクワ
(昭和61年撮影)

平谷のクワ

熊野団地の西に沿って流れる平谷川の河畔に三本集まって生育している。いずれも胸高幹囲〇・八メートル、樹高一〇メートルくらいのもので、現在県内で天然記念物として指定されているのは本樹のみである。群馬県沼田市石墨にある胸高幹囲五メートルのものは遠くおよばないが、都市化の進む熊野町内において、開発前の面影を残すものとし